

分科会A：座長所見

西 浦 誠 (追手門学院 大手前中・高)

「オーストラリア経済をどう教えるか」をテーマとした分科会Aでは、まず遠山嘉博先生が講演され、「日豪関係は、経済関係が先行して緊密化したがる、文化交流の遅れのため、貿易摩擦を招いた。その後は、オーストラリア政府の相互理解促進の努力があって、経済以外の諸関係もスムーズに進展してきている。そして今後、特に日本側における相互理解促進を図るために、次代を担う大学生や高校生や中学生に対する教育が重要な鍵となる。」と問題提起をされた。そして、ピーター・ガーン先生は、「オーストラリア経済についてほとんど知らない日本の学生にとって、最初の課題は、オーストラリアの経済的特質を大局的に見ることであり、その際、経済集計値の単純な比較は、オーストラリア経済のイメージを構築するために、有効なスタート・ポイントを提供する。」と比較によるアプローチ方法を具体的に提言された。

質疑応答の時間には、「オーストラリアに関する指導・研究を行う際に、最も大切にしなければならないことは何か」という質問がフローアから投げかけられたが、遠山先生は「オーストラリアのことを好きになることであろう」と明快に回答された。私自身、中学・高校六年一貫の私立学校教員として、今回のワークショップに参加をしたが、クィーンズランド州ブリスベン近郊に姉妹校を持ち、相互訪問（ホームステイ・プログラム）等を通じて交流関係を深めつつある。遠山先生が言われたように、「数多くの友人を作り、心からオーストラリアのことを好きになることが、相互理解促進の第一歩となる」ことを肝に銘じなければならない。また、海外研修という体験学習は、事前学習・事後学習によって補完され、より大きな果実を実らせることが出来る。例えば、GST（Goods and Services Tax）について事前学習する際には、ガーン先生が説かれたように、日本の消費税と比較するアプローチ方法が有益となるであろう。「どこが似ていて、どこが違うのか?」「新税創設や税率引き上げの歴史的背景は何か?」等々、こども達の財布の中身に直接関わる、我が国の消費税制度と比較することにより、オーストラリアのGSTをより身近な問題として学習することが出来るであろう。

最後のまとめセッションでは、コーディネーターを務められた松繁寿和先生が「ヨーロッパスタイルの国が近くにあるという認識を持つ」「オーストラリアは進化に成功した国である」といふ認識を大切にしよう」と呼びかけられた。そう言えば、日本でも「規制緩和」や「民営化」や「大きな政府・小さな政府」という問題を通して『将来進むべき道』が議論されている。ここでも、「進化に成功したオーストラリアをお手本とすることが出来るかどうか」という比較アプローチ的な切り口が、重要視されなければならないのであろう。

私の学校は、先に述べた姉妹校関係の機が熟し、いよいよ来年度より高等学校修学旅行においてオーストラリアを訪れることになる。もちろん事前学習での取り組みが成功の鍵を握ることであろうが、今回のワークショップで得た様々な成果を、是非こども達の日々の指導に生かしたいと思う。そして、オーストラリアに数多くの友人を作り、草の根レベルの相互理解の前進に少しでも貢献することが出来ればと願っている。